

経営協議会学外委員からの主な意見への対応状況
(2025年1月～2025年10月)

経営協議会	学外委員からの主な意見等	対応状況																																																																																		
第94回 （令和7年1月30日）	大学の「将来像」について 自身の親族が高校生で、国際バカロレア（IB：International Baccalaureate）のコースに通っており、一般の高校の教育とは異なり、生徒が主体的に一生懸命に学習した上でないと、自律性が高い授業についていけないと聞いている。一方、日本の教育は、従来、講義を受けノートに写すといった受動的な教育がなされてきた。大学生の学習時間が減少している中で、バカロレアコースを受ける高校生は、日本の伝統的な教育とは異なる自発性を重視した教育を受けている。一方で、バカロレアのコースの高校生が日本の大学に進学する際には、高い成績基準が求められている。また、昨今の円安の影響で、従来、これらの高校生の関心が強かった海外の大学への進学も、以前より難しい状況になっている。文部科学省がバカロレア校を増やしていることから、今後の学生供給が安定する可能性がある中で、円安が続く限り、バカロレアのコースを受ける高校生の国内の大学への進学志向も高まっている。このような特色ある教育を受けた学生の受け入れについて、本学も戦略的に考える必要であるのではないかと。	本学では特別選抜制度（学校推薦型選抜、帰国生等特別推薦選抜、外国人私費留学生選抜）を通して、一般入試を経て本学に入学する学生とは異なる多様な能力を持った学生を受け入れている。国際バカロレア・コース及びそれに準じるような中等教育を受けた学生については、特に帰国生等特別推薦選抜、言語文化学部・国際社会学部私費外国人留学生選抜によって受入をはかっているところである。入学後の追跡調査によるとこれらの選抜を経て入学した学生は優秀な成績をおさめていることが多く、今後、特別選抜制度の拡大を検討する。 高校では「探究型学習」が標準となり、生徒の主体的な学習（課題設定、課題の解決）が進められているが、本学は高大連携校に対して、本学教員・学生・院生が高校生の探究型学習への協力を進めている。これは高校・大学での学びを接続する試みであると同時に、主体性を持つ高校生を本学に導く目的も持っている。 なお、近年における入学実績は、次の別紙1のとおりである。 帰国生等特別選抜実施状況 別紙1 <table><tr><th>入学年度</th><th>学部</th><th>募集人員</th><th>志願者数</th><th>受験者数</th><th>合格者数</th><th>入学者数</th></tr><tr><td rowspan="4">2024（R6）</td><td>言語文化学部</td><td>若干名</td><td>11（4）</td><td>10（3）</td><td>1（0）</td><td>1（0）</td></tr><tr><td>国際社会学部</td><td>若干名</td><td>15（9）</td><td>8（7）</td><td>4（2）</td><td>4（2）</td></tr><tr><td>国際日本学部</td><td>若干名</td><td>11（4）</td><td>9（2）</td><td>5（1）</td><td>5（1）</td></tr><tr><td>合計</td><td></td><td>37（17）</td><td>27（12）</td><td>10（3）</td><td>10（3）</td></tr><tr><td rowspan="4">2023（R5）</td><td>言語文化学部</td><td>若干名</td><td>12（6）</td><td>8（3）</td><td>5（1）</td><td>5（1）</td></tr><tr><td>国際社会学部</td><td>若干名</td><td>12（7）</td><td>7（5）</td><td>3（3）</td><td>3（3）</td></tr><tr><td>国際日本学部</td><td>若干名</td><td>10（0）</td><td>8（0）</td><td>5（0）</td><td>5（0）</td></tr><tr><td>合計</td><td></td><td>34（13）</td><td>23（8）</td><td>13（4）</td><td>13（4）</td></tr><tr><td rowspan="4">2022（R4）</td><td>言語文化学部</td><td>若干名</td><td>11（4）</td><td>11（4）</td><td>3（2）</td><td>3（2）</td></tr><tr><td>国際社会学部</td><td>若干名</td><td>18（3）</td><td>7（0）</td><td>4（0）</td><td>4（0）</td></tr><tr><td>国際日本学部</td><td>若干名</td><td>7（1）</td><td>4（1）</td><td>3（1）</td><td>0（1）</td></tr><tr><td>合計</td><td></td><td>36（8）</td><td>22（5）</td><td>10（3）</td><td>7（3）</td></tr></table> ※各数値のカッコ内はIBの資格の者の数	入学年度	学部	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	2024（R6）	言語文化学部	若干名	11（4）	10（3）	1（0）	1（0）	国際社会学部	若干名	15（9）	8（7）	4（2）	4（2）	国際日本学部	若干名	11（4）	9（2）	5（1）	5（1）	合計		37（17）	27（12）	10（3）	10（3）	2023（R5）	言語文化学部	若干名	12（6）	8（3）	5（1）	5（1）	国際社会学部	若干名	12（7）	7（5）	3（3）	3（3）	国際日本学部	若干名	10（0）	8（0）	5（0）	5（0）	合計		34（13）	23（8）	13（4）	13（4）	2022（R4）	言語文化学部	若干名	11（4）	11（4）	3（2）	3（2）	国際社会学部	若干名	18（3）	7（0）	4（0）	4（0）	国際日本学部	若干名	7（1）	4（1）	3（1）	0（1）	合計		36（8）	22（5）	10（3）	7（3）
入学年度	学部	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数																																																																														
2024（R6）	言語文化学部	若干名	11（4）	10（3）	1（0）	1（0）																																																																														
	国際社会学部	若干名	15（9）	8（7）	4（2）	4（2）																																																																														
	国際日本学部	若干名	11（4）	9（2）	5（1）	5（1）																																																																														
	合計		37（17）	27（12）	10（3）	10（3）																																																																														
2023（R5）	言語文化学部	若干名	12（6）	8（3）	5（1）	5（1）																																																																														
	国際社会学部	若干名	12（7）	7（5）	3（3）	3（3）																																																																														
	国際日本学部	若干名	10（0）	8（0）	5（0）	5（0）																																																																														
	合計		34（13）	23（8）	13（4）	13（4）																																																																														
2022（R4）	言語文化学部	若干名	11（4）	11（4）	3（2）	3（2）																																																																														
	国際社会学部	若干名	18（3）	7（0）	4（0）	4（0）																																																																														
	国際日本学部	若干名	7（1）	4（1）	3（1）	0（1）																																																																														
	合計		36（8）	22（5）	10（3）	7（3）																																																																														
	外国とのネットワークも重要であり、日本国内のものはもちろんのこと、外国の博士号等の学位を持つことが国際的な職業において強みとなるため、ダブル・ディグリー・プログラムなど、外国の学位を取得できる制度が大きな魅力となるのではないかと。	現在、国際日本学部において、セントラル・ランカシャー大学（イギリス）と、メルボルン大学（オーストラリア）との間にそれぞれダブル・ディグリープログラム（DDP）を実施している。大学院総合国際学研究科博士前期課程（国際日本専攻）では、2025年4月に梨花女子大学から1名を受け入れる。また、大学院総合国際学研究科博士前期課程では、文部科学省の「人文社会科学系ネットワーク型大学院構築事業」に採択され、従来、中央ヨーロッパ大学（ウィーン）をはじめヨーロッパ4大学の間に進めてきたDDP「公共圏における歴史」をいっそう拡充することとなった。このプログラムでは今後、毎年10名程度のDD（ダブル・ディグリー）取得者を見込んでいる。 今後のDDPに関する予定としては、学部（派遣：国際日本学部、受入れ：言語文化学部、国際社会学部）において、リオ州立大学（ブラジル）とは2025年3月に調印しており、ホーチミン市人文社会科学大学（ベトナム）については、学内審議・承認を経て、予備協定書を先方に提出して手続きを進めている。 その他、インドネシア大学とは2024年8月に交渉を開始しているが、DDPの実施にあたって先方で新たにInternational course（英語プログラム）を設置しなければならないため、実現までに3～5年程度の年月を要する想定している。																																																																																		